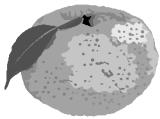


学生図書委員だより

発行 二〇一〇年一月
編集 学生図書委員

No.12



A
person
of
great
promise

今月の二首

君がふと冷たくないかと取りてより
絡ませやすき指と指なり

角倉羊子

頬を刺す風の冷たさよりも、この一連の出来事に、私の時間は一瞬止まった。

こんなにも湯呑茶碗はあたたかく
しどろもどろに吾はおるなり

山崎方代

私の冷めた心には、この湯気がちょっとだけ、不意打ちだったのです。

大つかみ出版社マップ 早川書房

この出版社全然知らないという人もいれば、この出版社にいつもお世話になっている、という人もいます。読者層がかなり両極端に分かれるであろう出版社、それが早川書房です。

専門はなんといってもミステリー、そしてSF。早川書房が、多くの海外ミステリーを日本に紹介した功績は大きいですよ。ハヤカワ・ポケット・ミステリは、装丁が洋書みたいでカッコイイ。

最近では、ミステリーに限らず、様々なジャンルで本を刊行している様子。早川ならではの凝ったラインナップは、なかなか挑戦的で、ですよ。

毎年冬はやって来るといつのにも、なんなんだこの寒さは！と思わず言いたくなる今日この頃。そんな日には、コタツにみかん、そして読書。今月の特集では、冬の日にふさわしい、読むだけで心がほかほかするあったか読書をお届けします。

瀬尾まいこの作品はどれを読んでもあったかいい気持ちになれるのですが、ここではデビュー作の『卵の緒』を。自分が捨てた子だと思っている育生は、母にへその緒を見せてとせがみます。しかし母が持ってきたのは卵の殻！親子って一体何なの？表題作のお母さんが、とってもキュートで凄くいいキャラなんですよ。

クラフト・エヴィング商會の諸本も、冬の室内で読むのにぴったり。静かで、美しく、幻想的で……

特集

冬はコタツで

あったか読書



装丁家としても有名なこの
ユニット、素晴らしいセンス

に惚れられます。まずは「雲を

売る」というおかしな広告に導かれて訪れる不思議な世界を描いた『クラウド・コレクター』で、彼らに水先案内人をしてもらいましょう。

そして、心があったまる、と言ったら、何と云っても人情話です。有名なのは半村良の下町ものや、藤沢周平の長屋もの、あとは浅田次郎作品の大半も人情ものと言えるでしょうか。その他にというところばり、時代小説が圧倒的に多くなりますね。現代に人情話は成立しないのか(笑)? 古き良き時代というのは、一種の架空空間なのかもしれません。

さて最後に、人情話といえば、落語を見逃しちゃあいけません。ひとつのカテゴリとして「人情噺」があるくらいですから。ふと人間関係の寒さに疲れたとき、落語の人情噺を聴いてほろりとなるのも、粋な冬の過ごし方かも。